

令和4年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月27日実施)	総合評価(3月7日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	○個に応じ、幼稚園から高等部にかけて系統立てた指導の実施による日本語の習得を図り、社会で豊かに生きるためのコミュニケーション能力の向上を図る。	①キャリア教育の推進を目指し、各教員の授業力向上及び学部間の系統化を図るために授業研究・授業公開を推進する。幼児・児童・生徒の日本語に係る実態を把握し、よりよい習得の方法を検討し、日本語能力に応じた指導の充実を図る。授業場面では、教材研究を充実させ、コミュニケーション能力の向上を図る。子ども自身が自身のキャリア形成を意識できるような指導の工夫を行う。 ②ICT等を活用し、視覚的支援をいかした指導を行い、個々の資質・能力の育成を図る。	①一人ひとりの研究授業や研究協議を通じて授業力向上を図る。他学部の研究授業・公開授業への積極的な参観をより推進し、他学部の状況を知る。そのうえでミッションや学校目標を達成するための教育課程の検討(カリキュラム・マネジメント)を行い、一人ひとりの実態把握や適切な課題設定など、個別教育計画に基づいたよりよい授業を行う。キャリアパスポートの活用などを通して、自身のキャリアを考えたり、自己理解を促したりするとともに、会話などを通して、人と関わる力の向上を目指す。 ②障害や発達段階に応じた視覚的支援を行い、よりわかりやすい授業づくりに取り組み、理解を促したり、思考を深めさせたりする。	①多くの教員が研究授業を行い、自身の授業力向上を図れたか。他学部の研究授業・公開授業への参観を通して、他学部の状況を知ることができたか。そのうえで課題を整理し、各学部の教育課程を整理したり、改善したりすることができたか。また、よりよい授業づくりにつなげられたか。子どもたちのコミュニケーション能力は高まったか。 ②個に応じた視覚的支援を行い、わかりやすい授業を行うことで、理解を促したり、思考を深めさせたりすることができたかのアンケート等を行い効果を検証する。	①小学部は奉仕的行事の設定、中学部は保健体育のカリキュラムの整理、高等部は教科や自立活動、学部行事の見直しを行った。 ①学部研究や年次研修に関わる研究授業を含め、職員の71.4%が公開授業を実施できた。 ①学部ごとに発達段階に応じてキャリアパスポートの活用が定着してきた。それぞれの学部で自己と向き合う時間を持つことができた。 ②音声言語や手話に加えて様々なICT機器やツールを使って提示することで、子どもたちの理解を深めることができた。	①個別教育計画や通知表の書式を教育課程に応じた標記の方法を全学部である程度揃えていく。また、小学部は学習指導要領と児童の実態に基づいた教育課程の見直し、高等部はシラバスの作成を通しての評価の観点や学習のねらいの共有化等、学部ごとに重点課題を明確にして取り組む。 ①キャリアパスポートに綴じこむ資料について、今後精選を進めていく。 ②Teamsのサーバ活用により教材データ等は共有フォルダに保管しているが、担当教科を越えた活用には至っていない。	①(保護者アンケート)肯定的評価81.3%令和3年度76.6%日本語力をつけてほしい。ろう教育の専門性を高める必要がある。(学校運営協議会)神奈川のろう学校のリーダー校として何をするかが大切である。 ②(保護者アンケート)肯定的評価70.8%令和3年度84.1%ICT機器の不足を解消してほしい。(学校運営協議会)もっと経験から学ぶ機会を増やしてほしい。	①研究授業や公開授業により、他学部の授業参観や指導案を参考に、指導の工夫等授業改善につなげることができた。学部研究を柱として、日々の取り組みや教科指導の中で実践を進めた。 ②引き続き、教材データ等の共有と活用を進めるため、サーバ内の整理と活用方法を徹底する。 ②教室に設置してあるモニターやPC接続用ケーブルの総入れ替えを行ったので、有効活用できるようにする。	①学習指導上の課題解決に向けた指導方法や、必要な知見の獲得を目指し、新たな研究テーマを策定する。学校研究は学部・グループの取組、公開授業、教科連絡会とリンクさせて推進していく。 ①公開授業は、職員の授業力向上のために、毎年実施する。 ①キャリアパスポートは、さらに活用をすすめるとともに、活用が難しいケースについて検討する。 ①今までの新転任者研修の内容を見直し、内容をニーズに合ったものにしていく。 ②ICT活用授業の充実のため、少なくとも授業時に一人1台のPCやタブレットが使えるようにする。
2 (幼児・児童・)生徒指導・支援	○それぞれの障害や発達段階を十分把握し、個のニーズに応じた指導・支援を行うとともに、集団活動を通して、協調性や思いやりの心を養い、自己肯定感を高める。	①配慮が必要な幼児・児童・生徒の情報共有を図り、健康と安全を守るとともに、一人ひとりのニーズに応じた支援を行う。 ②個別の指導と様々な集団活動を通して、自己理解や達成感を育み、合わせて互いの良さを認め合う取組を進める。	①関係職員とケース会を設定し、情報共有を図り、具体的な支援策の検討を行い、実行する。併せて効果の検証を行う。 ②学部学年を越えた集団活動や部活動(文化的活動・体育的活動)を通して自己肯定感を育み、協調性や社会性を養う。	①ケース会で情報を共有することで、指導上必要な配慮を行い、健康と安全を守ることができたか。また、適切な支援を行うことができたかを具体的成果から検証する。 ②集団活動を通して、互いの良さを認め合い、自己肯定感を高めることができたかを行動変容等から検証を行う。	①医療的ケア検討委員会や学部会等で情報を共有し、指導上必要な配慮を行い、健康と安全を守った。食事制限がある幼児にも、職員間で情報共有して適切な支援を行うことができた。 ②集団生活を送る上で必要なコミュニケーションについて、実態に合わせた言葉かけや支援を行った。	①医療的ケア対象の幼児は保護者のニーズもきちんと把握しながらよく相談し、支援策を検討する。 ②集団活動の提起の際に、個別の指導についてもある程度計画を立てるようにする。	①(保護者アンケート)肯定的評価85.4%令和3年度95.7%給食メニューが充実している。食育の推進を期待する。 ②(保護者アンケート)肯定的評価85.4%令和3年度85.7%ろう学校のよさを生かして、幼稚園から高等部まで交流して学びあう機会を増やしてほしい。	①職員の聴能に関する専門性の向上を図る。 ②個々の実態に応じた対応はできたが、特に集団活動と個別の指導の関連付けにおいて、全体としての計画性にはやや欠けた。	①必要に応じてケース会を実施し、有効な指導・支援の在り方について検討および実践を重ねていく。記録を必ず回覧して全体で共有し、指導力向上に努める。 ①聴能担当・係の配置を見直し、外部機関との連携を強化して業務を精選する。 ②縦割り活動や他学部との交流を行い、集団活動を充実させる。保護者に交流保育への参加を働きかける。
3 進路指導・支援	○幼児・児童・生徒・保護者のニーズを踏まえ、自立と社会参加に必要な学力と社会性、及び豊	①幼稚園・小学部・中学部・高等部の各段階において、個のニーズに合わせた体験的な学習を通し、主体的に進路選択できる、	①各学部の活動に将来の進路選択につながる視点を取り入れ、教育内容や指導方法の充実を図る。高等部においては、地域の企業や大学等と連携し、見学や実習を通して、意	①進路担当と学部の担当者が協力し、各学部の活動に将来の進路選択につながる視点を取り入れ、教育内容や指導方法を充実させることができたか。適切な職	①保護者懇談会や個別面談への進路担当の参加や各種学習会への保護者の参加など情報提供・共有の機会を増やすことができ	①実態に応じてキャリアパスポートを活用し、将来のことを考える機会を設ける。特に、高等部は進路先の決	①(保護者アンケート)肯定的評価66.7%令和3年度65.6%ろう児がロールモデルで学べるのが大切である。(学校運営協議会)	①高等部は学部進路係会を定期的実施し、幼・小学部は保護者懇談会に向けて教員間で意見を共有した。進路担当が各学部の進路に関わる	①生徒が進路について主体的と考えられるような指導の工夫について、担任や進路担当が話し合っている。 ②各教員が進路支援に

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月27日実施)	総合評価(3月7日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
	かな人間性を養い、適切な職業観を育み、主体的な進路選択ができるよう指導・支援を行う。	またはつながる力を育む。 ②一人ひとりの進路実現に向け、必要な情報を提供する。	欲と心構えを育て、それぞれに必要な支援を行う。 ②卒業生など聴覚障害のある社会人と接する機会を設定する等、生徒への情報提供を行い、進路だよりや学習会などを通し、保護者への情報提供を行い、適切な進路指導・支援を行うことができたか。	業観や進学に向けた意欲を育成することができたか。また、個のニーズに応じた支援を行うことができたか。 ②進路選択をしていくうえで、必要な情報を適切に提供することができたか。本人や保護者の希望に沿った進路指導や支援を行うことができたか。	た。 ②企業や卒業生から話を聞く会を設定した。生徒にとって身近で、活かした情報として有効だった。	定が目的とならないようにする。 ②保護者説明会や懇談会の実施について、回数や内容について検討し、保護者への情報提供を続ける。	コミュニケーションの大切さをお互いに認識して取組めるとよい。 ②(保護者アンケート)肯定的評価 76.6% 令和3年度 82.4% 進路決定に向けてさらに情報提供を充実してほしい。	ケース会に出席するなど情報を共有し共に考えることができた。 ②個別に必要な情報を提供することができた。情報提供・共有の機会を増やすことができた。	主体的に関われるように、各学部の教員と進路に関する情報共有できる機会を引き続き設定する。	
4	地域等との協働	○「ともに生きる社会」の実現に向け、地域における支援教育に関する専門性の向上を図ると同時に地域の住民等との協働による活動を進める。	①関係機関との連携を図り、ニーズに応じた相談支援を推進する。 ②切れ目のない支援体制の構築に向けて、地域の支援力向上のための情報発信や支援を充実させる。 ③交流及び共同学習、その他、様々な場面を通じて学校外の人との関わりを設定し、自己有用感を高めたり、普段関わりの少ない人との関わり方を学んだりする。	①校内外の相談ケースについて、病院や福祉機関との情報交換を計画的に行い、支援ニーズの把握と支援策の見直しを行う。 ②家庭や保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、医療、福祉等と連携し、的確な支援ニーズの把握や具体的な支援策の共有を図る。 ③これまでの各学部での取り組みを基に、よりよい交流および共同学習のあり方を検討し、実践する。また近隣の企業や社会福祉法人、商工会議所、青年会議所等の外部団体と連携し、地域の人と一緒に子どもたちが活動する機会をつくる。そのことにより、子どもたちの人と関わる力の向上を図る。	①関係機関と計画的に連携し、相談ケースの指導や支援にいかすことができたか。 ②地域で学ぼう難聴児の指導と支援の充実につながる情報発信や支援を行えたか。 ③各学部の実態やねらいに合った、よりよい交流及び共同学習のあり方を検討し、計画的に実施することができたか。また、外部団体等との活動を計画し、実施することができたか。様々な活動を通して、子どもたちの人と関わる力の向上につながったか。	①校内外相談では、担任、自立活動班、専門職、他校、児相、教育委員会、福祉、病院、補聴器業者等と連携して支援を行うことができた。 ②地域の支援力向上に向け、コロナ禍での新しい研修や交流の形を模索することができた。 ③各学部の実態やねらいに沿って、地域の学校や外部団体との交流及び共同学習の場を11団体で14回設定することができた。	①自立活動班と連携し、病院や業者とのより良い連携の在り方について検討していく必要がある。 ②転出ケースの引継ぎやアフターフォローができたが、合理的配慮に対する理解・協力も学校や地域による差が大きかった。 ③子どもたちが地域の人と交流及び共同学習を行える機会を増やしていく。各学部や他班と連携を図り、見通しをもって予定を立てていく。	①②(保護者アンケート)肯定的評価 55.6% 令和3年度 68.9% 保護者が、手話、聴覚、発達について学べる機会を増やしてほしい。(学校運営協議会)手話講習や学校・会社でのリーダー研修等を行うなど理解啓発を進めていくとよい。 ③(保護者アンケート)肯定的評価 51.1% 令和3年度 72.9%(学校運営協議会)地域協働本部が動き出すので活用してほしい。	①②合理的配慮の理解・啓発に向け、市や県の教育委員会との連携が必要だった。 ③学校ホームページでの活動報告やチラシの配布、作品展会への参加など、広報活動に努めることができた。 ②地域のニーズに合った持続可能な研修や交流の形を検討する必要がある。 ③地域の小学校と互恵性のある交流内容を検討していく。(交流校の児童に対してアンケートを実施し、よりよい交流の中身やあり方について検討する。)	
5	学校管理 学校運営	○安全で安心できる指導・管理体制の整備を進め、学校の危機管理能力を高める。 ○教員のワークライフバランスを推進するために、教員の働き方改革を推進する。	①保護者との連絡体制を含め、非常時を想定したできる限りの実践的な取組を推進する。 ②幼児・児童・生徒と向き合う時間を確保する方策を検討し、時間を生み出すことで、適切な支援につなげる。	①「平ろうメール」を効果的に活用して情報発信するとともに、体験的で実効性のある訓練を継続的にを行い、より効果的なものとする。 ②ポータルサイトを活用して資料を提示する等の工夫を行い、会議の効率化を目指す。また、さらなる方策の検討を行う。アンケートで効果の検証を行う。	①非常時を想定した体験的で実効性のある取組を推進することができたか。また、今後の方向性を確認できたか。 ②会議時間を短縮し、幼児・児童・生徒と向き合う時間を確保することができたか。また、そのことが適切な支援につながったか。また、働き方改革の実感を職員がもてたか。	①様々な非常時を想定し、3回の避難訓練と防災教室・DIGを実施し、児童・生徒が実際に避難行動をとる実践的な訓練を行うことができた。 ②ポータルサイトの活用が進み、情報共有がスムーズになったため、学校全体の会議数を2割削減できた。学校業務サポーター1名が増員された。	①「平ろうメール」の加入率がほぼ100%となり、緊急時以外の活用についてもすすめていく。 ②ポータルサイトの活用による業務の効率化は進んだが、会議の効率化は検討が必要である。	①(保護者アンケート)肯定的評価 72.9% 令和3年度 80.0% 手話やろう教育を理解している教員を配置してほしい。 必要な連絡はあるが、もっと情報発信してもよい。(学校運営協議会) ②(保護者アンケート)肯定的評価 83.7% 令和3年度 88.7%	①平塚市の福祉避難所の研修に参加し、本校が福祉避難所として、実際に機能できるように検討を進めた。 ②業務アシスタント1名と学校業務サポーター2名の体制で、教員でなくても行える業務を担当しているが、十分に活用できていない。	①「平ろうメール」のメンテナンスを工夫し、必要に応じて活用していく。 ②Teamsをハブとしながら他のMicrosoft 365のアプリも連動して使用することでより効率的に業務が進められるように体制整備していく。業務サポーターができる業務を整理して提示する。